

あけましておめでとうございます。今年も皆様にとって良い年でありますように。

平成21年、2009年が始まりました。大晦日に深夜（早朝ともいう）まで飲み明かしていた欧州派の人も、ひっそりと厳かに年越しそばを頂いて新年を迎えた人も、この稿を手にするときにはすっかりと日常生活に戻られていることかと思えます。

さて連載も85回、この前身の投稿も入れると95回になり、いささか書くネタが尽きてきました。そして毎月のように遊びネタや食べ物ネタではなく、新年にふさわしいお話をとを考えているうちに締め切り間近になってしまいました。そこで私の個性には似合わない表題について書いてみようと思いをいれました。

勝者はどの世界にもいますよね。つまり勝者無き世界はないと思います。そして勝者の影には敗者ありですよ。身近なことでも、例えば幼稚園の運動会でもかけっこで一番になった子どもは勝者。ビリになった子どもは敗者となります。アナログ無き世界なのですね。でもその中に美学があると思います。

いささか旧聞に属しますが、1984年のロスアンゼルスオリンピックでの出来事です。柔道の無差別級に参加していた山下選手（前全日本柔道監督）の話です。その前のモスクワオリンピックをボイコットしたことで山下選手は4年も世界最高の舞台を待たされていたのです。そして勝負が始まりました。何回戦か忘れてましたが、西ドイツ（当時）の選手の仕掛けた足技で、山下選手は足を骨折してしまいました。正式な診断名は骨折ではありませんでしたが、ほとんど骨折と同じような重傷を負ってしまいました。そして決勝戦。山下選手はその折れた左足を庇いながらも、エジプト代表のラシュワン選手に押さえ込み一本で勝ったのです。その表彰式での涙に思わず私も涙してしまいました。そしてその後、山下選手の凄みのある心意気が判るコメントがありました。世界の頂点に立った山下選手は「ここまで来て怪我をすることはまだまだ柔道の奥の細道にたどり着いた程度です」と言うようなコメントを残して会場を去りました。最高の舞台に立ち、最高の成績を残した世界一の山下選手が、それを誇ることなく、その機会に怪我をしてしまった自分はまだ未熟者だと言うようなコメントをされたことに、本当に鳥肌が立つような気持ちになったのです。「世界一になったのだからもっと誇りあるコメントをしても良かったのでは」と思いましたが、逆に世界一になった者だからこそ言えたコメントだと思いました。恐ろしい勝者の美学だと思います。誰もが勝った瞬間、自分が一番だとみんなにアピールしたくなりますよね。パチンコ、マージャン、競馬、ゴルフの勝ち話はよく耳にします。でも負けた話はあまり聞きませんよね。誰もが勝った話をしたくなるのは人間の本来の姿だと思います。しかし、世の中には恐ろしい、勝者以上に恐ろしい美学を持った敗者がいたのです。それは相手のラシュワン選手でした。私はその瞬間、ラシュワン選手のコメントをテレビで見えていなかったのですが、その後活字にされたラシュワン選手のコメントは勝者に匹敵する美学がありました。居並ぶプレスはなぜ怪我をしている山下選手の左足を責めなかったのかと言う質問が繰り返されました。確かに一度だけ、山下選手の怪我をしている足に足払いをかけたのですが、それを外されてから二度と怪我をしている足への攻撃はありませんでした。しつこく迫るプレスにラシュワン選手は「怪我をしている足をどうして責めなかったかと繰り返し聞かれるが、そこまでして勝ちたくなかったんだ」と答えたそうです。血の滲むような稽古をしてつかんだオリンピック代表選手。そして全霊を傾けて手に入れたオリンピックの決勝戦。その試合に相手のハンディを攻めずに勝とうとしたラシュワン選手。プロフェッショナルでは許されないことだと思いますが、武道家としての彼の心意気は敗者でありながら美学は勝者だったと思います。

その翌年。1985年。野球では阪神タイガースが初めて日本シリーズに勝ち、日本一になりました。今でも覚えています。「エース無き攻撃野球の成果」などと言われ、バース、掛布、岡田選手のクリーンナップ。その前後に並ぶ一癖も二癖もある脇役。そして先頭打者で走攻守揃いながらもホームランを打てるタイガースの新監督に就任した真弓選手などが揃ったアミューズメント豊かなチームでした。その日本一を決めた西武球

場での戦い。いきなり長崎選手の満塁ホームランで優位に立ったタイガースが最後まで西武ライオンズを攻め、ほぼ優勝が決まった9回に掛布選手がトドメのホームランを打ちました。そしてダイヤモンドを走り、三塁を蹴ったあと、控えめに、とても控えめに指を一本だけ立てて「日本一」を表すしぐさをしました。何かの雑誌で読んだ覚えがありますが、掛布選手はお父さんから「ホームランを打って喜ぶのは良いが、打たれた投手もいることを忘れてはならない」と言われたそうです。それから掛布選手はホームランを打っても派手なガッツポーズをしなくなったそうです。でも日本一になったことで思わず小さなポーズが出たのだと思い、とてもとてもうれしい思いをしたことがあります。

サッカー選手が得点したとき「俺が俺が放り込んだんだ！見てくれ俺を！」と言うような派手なポーズで観客にアピールします。それは勝者の姿だと思えます。ラグビーでも最近トライの後、ガッツポーズをしたり、ボールを客席に放り込むパフォーマンスをする選手も増えてきました。柔道でも勝敗が決まった後、礼もおろそかに飛び跳ねて勝利を味わっている選手が増えてきています。勝つ喜び、勝者の喜びを表現することに対しては否定する気持ちはまったくありません。しかし、美学を兼ね備えて欲しいなと思えます。

私達の幼稚園では毎年11月にスポーツデーと銘打って運動会のような行事を行っています。そして毎年園児たちにお話をします。「かけっこや競争に勝ったとき、思いっきり一度だけ（やった～！）と叫んでいいよ。勝ったからね。でも一回だけだよ。そして負けた人は一回だけ（くそ～っ）と叫んでいいよ。負けて悔しいからね。そしてその後、お互いにひとこと言おうね。（勝っておめでとう）（負けたけど君もがんばったね）」と。勝者を認め敗者を認めお互いを称えあう、そんな関係になって欲しいなと思えます。

今、私達を取り巻く環境は勝者の傲慢、敗者の萎縮になっているのではと思うことがあります。「勝ち組、負け組み」などと言う正体不明の言葉も独り歩きしたことがありますよね。でも今だからこそ美学に立ち返って欲しいなと思えます。私達はそのような国に生まれ育ってきたのですからね。デジタルではなくアナログの世界に生きて行きたいと思っています。

《つづく》